

第3期「確かな学力育成プラン」検討委員会 議事録（第5回検討委員会）

◆日 時 令和5年1月16日（月）午後2時から

◆場 所 上杉分庁舎 12階 第1会議室

◆出席委員

氏 名	現 職 等	備 考
児玉 忠	宮城教育大学 教授	委員長
稲垣 忠	東北学院大学 教授	副委員長
我妻 良行	片平丁小学校 校長	
鹿野恵美子	東六番丁小学校支援地域本部 スーパーバイザー	
齋藤 孝志	株式会社サイコー 代表取締役	欠席
齋藤 亘弘	八乙女中学校 校長	
佐々木 大	INTILAQ 東北イノベーションセンター長	
佐藤 真奈	仙台市PTA協議会 副会長	
千葉 恵美	仙台市PTA協議会 副会長	

◆配付資料

- ① 第3期「確かな学力育成プラン」第5回検討委員会 次第
- ② 仙台市確かな学力育成プラン2023 最終案
- ③ 仙台市確かな学力育成プラン2023 概要版 最終案
- ④ 第3期「確かな学力育成プラン」第4回検討委員会 議事録

◆会議概要

1 開 会

2 学校教育部部长挨拶

3 協 議

- ・「仙台市確かな学力育成プラン2023」最終案について

事務局より 本編・概要版について、修正点を中心に説明

児玉委員長：最終案について、各委員から意見や要望を発言いただきたいと思う。

我妻委員：章の整理等がなされ、意図が伝わりやすく、たくましく生きる力の図もだいぶ分かりやすくなったと思う。目指す方向性が分かりやすい。確かな学力には3つの要素、たくましく生きる力では5つの力の総称との表現とあるが、力と態度の関係から考えると、「たくましく生きる力=5つの力」という表現が適切かどうか気になった。また、P.21のところだが、「自分づくり教育を通して、生きる力を育みます。」というように表現をそろえると読みやすいと思う。目指しているものが何かを整理して、表現をそろえるようにすると伝わりやすいのではないかと。最後に、策定した後、たくましく生きる力をどうやって進めていくかが大切だと思う。授業プランではなく、各教科の中で育むことを意識して進めることが重要である。いかにカリキュラム化して日常化していくかが大切である。

- 蓮沼室長 : 5つの力については、たくましく生きる力の定義であることから基づいているものである。また、御指摘のとおり、たくましく生きる力を各教科の学習でも育成を目指していくことが大切だと認識している。
- 児玉委員長 : 現行指導要領に基づきながら、生きる力の前に「たくましく」を付けた仙台市のオリジナリティを日常化していくという提案だと思う。
- 鹿野委員 : このプランはよくまとまっているので、一人でも多くの保護者、地域の方に読んでもらいたい。読んだ上で、いろいろな情報共有ができるのだろうと思う。読んでもらうことで、保護者の理解が広まり、先生方の負担も減るのではないかと感じた。コロナの影響で、外部の方がなかなか学校に入る機会が少なくなった。子どもたちにとって、目の前で認めてもらう機会が少なくなっていることを心配している。少しでも早く、地域の方々などが入学式や卒業式などに参加でき、子どもたちの姿を見る機会ができればいいと願っている。学校支援本部の立場として、コロナ禍でなかなか顔が見える活動ができずにいる。地域本部の一員として、たくましく生きる力の一助ができればと感じた。
- 千葉委員 : 前回の会議を受けて、たくましく生きる力がどのように図の中に表されてくるか楽しみにしていた。たくましく生きる力の育成が一目で分かるようになっていて、分かりやすい。保護者の中でも、コロナ禍の影響で、横のつながりが薄くなってしまっている。自分の子どもと友達の保護者もわからない。さらにはPTA活動も少なくなってきた状況である。町内会や子供会での関わりも少なくなっている。こういった子どもたちを育てるために議論を重ね、つくられたプランがあるということ、広く周知されることを願う。
- 児玉委員長 : 保護者のPTA参加というのは、ポストコロナの大きな問題となっている。学校は社会で子どもを育てるものである。今後、仙台市としての方向性が必要だと感じた。
- 蓮沼室長 : 連携する必要性を訴える中で、なかなかできないもどかしさがある。コミュニティ・スクールが突破口の一つになるかもしれない。子どもの活動を充実させながら、必要な関わりを見直していく必要がある。「この活動に支援してほしい」など具体的に伝えていく必要があると感じている。
- 稲垣副委員長 : p.19の図は、前回と比べてもすごく良くなったと思う。p.21のところで、「優れた指導手法の習得」とあるが、読み返してみると、ここは「習得」でちよいのだろうか。「授業力のレベルアップ」とかにした方が、よりストレートに伝わるのではないか。p.21のFのところだが、Fが全体を支えるような位置付けとなると思われるので、どこもつながっていないというのではなくした方が良い。たくましく生きる委員をしていたので、その立場からコメントをすると、もともとたくましく生きる力を考えていた途中で、自分づくり教育の5つの力が示された。これはとても近い関係だからつなげてしまおうと後から議論されたものであった。その時は、「たくましく生きる力=5つの力」とした。指摘どおり、態度に近いものを「力」と表現している部分は、学力論的には変なところもある。現在の資質・能力の関係でいえば、態度も資質・能力に入ることになるので、そういった面から理解いただければと思う。カリキュラムのこと、しなやかさのことを話したが、10年ほどたくましく生きてきた中で、考え直さなければならない時期に来ていると感じている。教育構想に沿った形での考え方の見直しを、どこかに入れておけば、今後の方向性にもなるだろう。P.40のところで、「自分が好き」ということを、自己肯定感としているが、自己肯定感とは良いところも悪いところも含めて、自分を受け止められるという考え方なので、「好き」と言い切ってしまうといいのかが、少し気になっている。こまかく言うと、「ありのままの自分を受け止められる」ということになるとのと思うが、市としての捉え方があるのであれば、整理しておくといの

ではないかと感じた。最後に教科書のデジタル化と記載があるが、そう書いてしまうと、紙の教科書がなくなってしまうような印象を受ける。今現在は紙との併用を原則としているので、デジタル教科書の導入という記載にしていた方が誤解はないのかと思う。p. 43 の今後の方向性のところで、4月がゴールに見えるので、矢印のスタートを修正するといいたいと思う。

蓮沼室長 : 具体の子どもの姿をイメージして、意識したカリキュラムを考えていくようにする。そういった意味で自分づくり教育はいい素材になると思っている。活動の場を広げていくということもプランの中で実現できていけばいいと思う。

児玉委員長 : どこかの学校にモデルプランとしてやってもらうということは、一つの事例を具体化して可視化しておくということになる。もしかすると大事なこともかもしれない。

佐藤委員 : このプランは、どれくらいの方々の目に触れることになるのか。

蓮沼室長 : ホームページで発信していくことになる。学校には1冊送付することになるが、先生方には電子データでの周知となる。様々なところにリンクを貼って広げていくことが必要かと考える。

佐藤委員 : とても見やすく、分かりやすくなった。どの部分とどの部分につながりがあって、説明されているのか、色分けなども見やすくなったと思う。前回、意見を言わせてもらった図も、とても見やすくなった。ICT やコミュニティ・スクールなど、最近になって変化してきたことで、みんなが同じ方向を向いていけるようにプランをまとめていくのは大変な作業だったと推察する。いろいろな人の目に触れることができるようなプランに出来上がっていると思うので、多方面から関わっている方々が目標を共有できるということが、まさに今、必要なことだと感じている。仙台市に限らず、全国的にも不登校など、心のケアが必要な場合があると思う。それにどう対応していくのかといったきめ細やかなところまで考えられているプランであると思う。

蓮沼室長 : 安易にホームページで発信とはいうものの、今までと同じところにしか伝わらないという心配がある。全てを伝えるのではなく、必要なところに必要は部分を伝えにいくようにしないとダメだろうと感じている。周知をしていくことの難しさであり、今までのフレームだけで考えていくのではだめだろうと思う。

佐々木委員 : 確かな学力育成プランのターゲットは子どもたちだが、対象は学校の先生であり、我々大人であると思う。その人たちにとって分かりやすくなければならない。見たときに分かりやすく理解して、実践していこうという気持ちになるようではなければならない。そう思うと、概要版は片面1ページぐらいまでまとめればよかったのではないかと。企画会議などで出したらA3両面は多すぎて受け入れられない。次に「確かな学力育成プラン」とは「学力」という言葉がついているので、「学校の成績・テストの点数」というように思ってしまう。それがファジーな感じで、いろいろな力が乱立しているので、戸惑いがある。そのために、本編の最初が大事で、何を指すのかがはっきりすべきだろうと思う。冒頭に「確かな学力」の定義をはっきりすべきではないか。また、育成プランの成果を何で測るのか。「主体的な学習態度」が伸びたかどうかは、例えば何かを発表するということもあるだろう。どれで成果を図るとか、はっきり明記できると良いだろう。最後に、「前プランでこんなところが課題だから、このプランではこうした。」と冒頭で明記すると伝わりやすいのではないかと。他の自治体では、同じような感じでプランということ策定しているのか。

蓮沼室長 : 教育構想は各自治体である。学力育成のための取組をまとめたものもあり、それぞれの自治体で特色が出ていると思う。教育構想の中の、学力の部分はどう捉えているかは、自治体ごとに若干違っているかもしれない。知識の部分の「学力」という側面、認知的な学力を高めるのを目的とするのではなく、それ

を使えるようにしていくことが大切だということもある。質的な部分に着目しているといったような違いはあるかもしれない。認知的な学力がきちんと身に付いた形で、将来生きていくために必要な力とか、より良い社会に必要な力とか、そういったことが学力だという流れは、おそらく共通ではないか。

佐々木委員：その流れを「学力」と言ってしまうと、理解してもらえない。だから冒頭に定義が必要ではないかと思う。最終的に目指すのは、「たくましく、しなやかに生きる力」であり、目指す方向性が、言葉や図で示されればいいと思っている。「たくましく生きる力は児童生徒の確かな学力を育成するために欠かせないもの」という表現も、いろいろな捉え方が出てきてしまうだろう。「たくましく生きる力」が大切なのに、「学力」の中にそれがあろうと、違和感がまだある。たくましく生きる力を持った子どもたちを育てたいと考えたときに、違和感を持ってしまう。私の率直な感想である。

児玉委員長：「確かな学力」と「たくましく生きる力」の関係については、佐々木委員は一貫して違和感をお話しいただいている。これは、この委員会の名称と、本来上位概念と思われる「たくましく生きる力」の整合性をどう捉えるかということと、事務局が苦勞した部分かと思う。改めて思ったのは、一般の人は「学力」といったら、テストの点数のことと捉えるだろうが、教育関係者はもっと広い概念と捉えているだろう。ここにずれが生じている。一般の人がイメージする学力と教育関係者が考える学力の意味でずれがある。どうしてずれが生じるかという、学力調査とかテストの点数とかが、検証するための評価の材料にならざるを得ないからである。このことが「学力」とはペーパーテストのことなのだとの誤解を持たれてしまうことにつながっていると思う。そう思うと、領域Fの部分の、学力の検証がこれだけでいいのかと考えた。ここでは、学力調査だけでなく、生活状況調査も含まれているので、その考えは担保されているが、一般の人には伝わりにくいだろう。今後に向けて、領域Fの成果検証のところももう一つ工夫をしていく必要があるのではないかと思う。

蓮沼室長：ここが難しいところで、検証や評価を考えると、どうしても結果が求められてしまう。

児玉委員長：その部分が難しい。育成と評価はきれいには一致しないものである。育成する力は広くなければならないが、評価は狭くしかできない。この矛盾を共有できないといけない。

蓮沼室長：今回プランで、自分づくり教育を重点化したことで、何かしらの発信ができるのではないかと思っている。

佐々木委員：例えば、プランの中にもある、「将来の夢や目標を持っている」というところを何%アップするといった指標などもありなのだろうか。

蓮沼室長：ありと言えばありだろうが、今、夢を持っていないければだめかと言えばそうではない。違う側面も必要で、そこまで細かな質問紙調査の実施は難しい。端的な部分での質問はできているが、それを生活・学習状況調査での質問で見ていくのか、普段の生活の様子から見とっていくのかというのはこれからの進め方になる。

児玉委員長：やはり、育成も測定も難しいことに取り組もうとしている。必要な力は何かと考えていくと、育成の範囲が広がってくる、広がってくると測定が難しくなってくる。優劣がつけられない学力の中の話になってしまう。本質的な部分も今日は議論できたと思う。

蓮沼室長：学力プランの守備範囲はどこかも考えないといけない。考え方によっては、教育構想の範囲になってしまう。

齋藤委員：前プランと今回のプランに携わって、学力の考え方の枠が広がっていることもあるし、プランの対象としている方々も広がっていると感じた。何を対象にど

う分析していくか、どう周知していくかといったことが、前プランからも大きく変わってきていると感じた。領域Fの話をさせてもらおうと、前回話をさせていただいた、44ページの点検評価の進め方が新たに付け加わり、進め方の図も挿入され、とても良かったと思った。その中で、具体的な施策の中で位置付けてあれば、その番号を記載したりするとその関連性がはっきりと分かるのではないかと思う。確かな学力研修委員会の説明の部分は、開催期間を考慮に入れて枠を広げると、何を説明しているかがより分かりやすくなると思う。先ほど、確かな学力の定義の話があったが、このプランの守備範囲はどこなのかを考えて、明記することは大事であると思う。

佐々木委員：最終案はよくまとめていただいたと思う。あとは削る努力が必要だと思う。言いたいこと、伝えたいことを書いていくと、たくさんの文量になってしまう。概要版はA4サイズ1枚程度にまとめると読みやすいのではないか。最後我々が目指しているのは、周りの関係者ではなく、子どもたち、そして、それを支える先生たちに理解してもらうことが大切だと思う。そういう意味での困難はこの自治体でもあることだろうと思うので、仙台市のプランがそういった部分をクリアしているといえるようなものにしたい。

児玉委員長：先ほどのA4サイズ1枚という話が印象に残った。かつて、国語科の学習指導要領の内容についての議論で、中学校卒業段階の「書くこと」の目標として、A4版1枚の文章が書けるようにというのはどうかということが取り上げられたことがあった、そのように、学習指導の目標となるゴールイメージを明確かつ具体的にした方が教育現場に分かりやすいのではないかという議論であった。そのゴールイメージがA4サイズ1枚、1600字を書けるのを目標にしたらいということである。ビジネス関連でもA4サイズ1枚に簡潔にまとめるというのがあるだろう。最終案の完成に向けて、新鮮な目で見てもらおうと、事務局としてもありがたいと思うので、何かこの後意見が出てきたら、今週中を目安に事務局に伝えるようにしてもらおうといい。

4 連絡

(1) 今後の予定（事務局より）

本日の意見を反映させて、最終案の完成に向けて進めていく。この後、何かあった場合、メールでのやりとりで、金曜日までお願いする。その後、委員長と事務局で最終調整をする予定で進めさせていただく。

最終案確定後、児玉委員長にプランの説明を教育長にさせていただく予定である。

5 閉会

この議事録について、会議の内容と相違ないことを認める。

令和 5年 3月 31日

第3期「確かな学力育成プラン」検討委員会

署名委員

佐々木 大